

# ラオス・ナムトゥン2水力発電プロジェクト 現地訪問(2008年4月)報告



**Mekong Watch**

2008年5月28日作成

## 目次

1. はじめに
2. 訪問日程
3. 移転村の現状
4. 主な懸念点

### 1. はじめに

2008年4月26日、カムアン県の中心都市タケクから、ナカイ高原へ車を走らせた。半年前までは未舗装だったという道路は、タケクから60キロメートルあたりまで、コンクリート舗装が完了していた。その約2週間前の4月10日、ナカイ高原のナムトゥン2ダムの建設サイトでは、転流用のトンネルが閉鎖され、湛水が開始されている。住民移転が「ほぼ」完了したナカイ高原では、移転住民たちが NTPC の補償に生計を頼る中、生計回復プログラムや水没予定地のバイオマス除去など、プロジェクトが行った様々な「約束」の破綻が浮き彫りになってきている。現地訪問で聞かれた移転住民の声と、訪問から見てきたナカイ高原の現在と将来の懸念をレポートする。

### 2. 訪問日程

#### 2008年4月26日

- 旧ナカイヌア(Nakai Neua)村
- ターラン(Thalang)村:移転村
- ダムサイト
- ソップフェーン(Sop Phene)村:移転村
- ソップヒア(Sop Hia)村:移転村
- ソップマ(Sop Ma)村:移転村
- ナカイヌア(Nakai Neua)村:移転村

#### 2008年4月27日

- ウドムスック(Oudomsouk)村 :移転予定地
- ドーン(Done)村:移転村
- ノンブアサーティット(Nong Bua Sathit)村:移転パイロット村

### 3. 移転村の現状

#### 【旧ナカイヌア村】

ナカイヌア村では、2008年3月末から4月の半ばにかけて、移転が行われたばかりだ。

旧ナカイヌア村では、家の解体作業と木材の運搬が行われていた。ほとんどの世帯は生活の基盤を移転村に移していたが、湛水が開始された今も、まだ移転先の住居が完成せず、村に残っている世帯があるという。

また、村の中に、家事で焼けてしまった家があり、理由を聞くと、移転で村人がいなくなった後、不審火で火事起きたといい、移転住民は治安面での不安も抱えていた。

旧ナカイヌア村でのインタビューからは、NGOなどがこれまで指摘してきた商品作物栽培による生計回復や家畜の放牧地の確保などの課題が、解決されずに残っていることが明らかになった。



家の解体作業が進む旧ナカイヌア村

#### ◆ インタビュー：家の解体作業に来ていた男性（30代）

男性の家族は、10日ほど前に新しい村に移った。男性によれば、村の移転はほぼ完了したが、まだ移転村の新しい家が完成していないため、移転できずにいる家族が1世帯あり、移転は5月になる予定だという。

移転後、ナムトゥン2電力会社(NTPC)からは、卵、

肉、米などの支援を受けている。

男性の家族は、今年、1ヘクタール程度の土地で焼畑を行う準備をしているという。その他、居住地内に0.1ヘクタールほどの野菜畑があり、現在、整地を行っているところだ。

男性の家族はかつて30頭の水牛を飼っていたが、新しい村には3頭しか連れて行かなかった。「現金が必要だったし、新しい村には放牧地がないから」という理由で、去年も4頭の水牛を売った。

非木材林産物(NTFPs)の採取について尋ねると、今は古い村の回りでタケノコが採れるが、水没したら採りに来られなくなるという。

移転後の生活について、彼は貯水池漁業への期待を語った。「1年目はあまり魚が獲れないと聞いているが、2・3年目以降はたくさん獲れると期待している」。



旧ナカイヌア村から臨む貯水予定地

#### 【旧ナカイヌア村からターラン村に続く道から臨む水没予定地】

旧ナカイヌア村からターラン村に向かう途中、北東に広がる水田と森林の光景は、プロジェクトが決定される前からほとんど変わっていないように見える。乾季の水が引いた水田には牛や水牛が放され、草を食べている。これまで何年もこの地で営まれてきた牧畜の様子は、ここが水没予定地であることを忘れ

て見れば、牧歌的な光景だ。しかし、4月10日に転流用のトンネルが閉鎖され、ダムの上水が開始され、6月には水門が閉じられることを思い出すと、この光景が意味するところは一変する。4月現在、これだけの森が貯水予定地に残されているということは、十分なバイオマスの除去が行われないうまま、ダムに水が溜められることは確実で、それは貯水池の水質の悪化、ひいては貯水池漁業の失敗の懸念、ダムの上水が流されるセバンファイ川への社会・環境影響の悪化につながる。また、移転を終えたナカイの住民たちが、新しい村から離れた貯水予定地で放牧を続けているということは、新しい村には十分な家畜の放牧地がないということが容易に推測できる。



旧ナカイタイ村近くの水没予定地。多くの水牛や牛が放牧されていて、ダムに沈むはずの土地には、除去されるはずだった木々が残されている。

### 【ターラーン村】

ターラーン村は、2007年4月に移転が行われた。食堂とゲストハウスを営む夫妻に話を聞いたところ、NTPCが設置した給水ポンプに不具合があり、乾季には水が不足するという問題が指摘された。また、米の支援について、今年にも支援が打ち切られるという話もあるが、住民は生活が再建されるまで、支援が継続されることを信じている。

### ◆ インタビュー：食堂とゲストハウスを営む夫妻

電気はまだ引かれておらず、ジェネレーターで発電している。電気はダムができたら使えるようになると聞いている。給水ポンプは、5世帯に1つ作られているが、石や砂が詰まって水が出ないことがあり、特に乾季は水が足りなくなるという。

補償地として与えられた菜園までは徒歩で10分ほどだが、ダムができると道が水没するので、ボートで菜園まで行くことになる。

現在はNTPCから毎月、米の支援を受けているが、それがいつまで続くかは分からないという。「畑や漁業の収入で足りない分の米をサポートしてくれることになっているので、十分な米が買えるようになるまではサポートしてくれるはず」と女性は支援継続への期待を語った。

女性に「前の村と今の村、どちらが暮らしやすいか？」と尋ねると、「(新しい村には)まだ慣れていないので、前の村の方が良かった」との答えが返ってきた。

### 【ダムサイト】



湛水が始まったばかりのダムサイトの様子

世界銀行の発表<sup>1</sup>によれば、2008年4月10日に、

1

<http://web.worldbank.org/WBSITE/EXTERNAL/COUNTRIES/EASTASIAPACIFICEXT/LAO>

ダム建設のために作られていた転流用のトンネルが閉鎖され、ダムの湛水が開始された。6月にはダムの水門が閉鎖され、本格的に水が溜められるという。

しかし、ダムサイトの周辺でも、伐採されないまま残されている木々が多く見られ、バイオマス除去が適切に行われていないことは明らかだ。



ダムサイトの近くでは、林が水に浸かっている光景があちこちで見られた。適切なバイオマスの除去が行われず、水没すれば、貯水池や下流の水質悪化が懸念される。

### 【ソップフェーン村】

ソップフェーン村は、2007年7月に800メートルほど離れた仮の居住地から、今の場所に引っ越してきたという。メコン・ウォッチが2006年に同村で行ったインタビューによれば、移転村の造成が遅れていたが、工事が進み、水が村まで上がってきってしまうので、2006年4月から6月に古い村を離れ、移転村が完成するまで仮の居住地に移されていた。2006年のインタビューで、村人の一人は、「(仮の居住地では)家屋が密集しているの、病気や火災が発生しやすいのではと心配している」と語っていた。新しい移転地に移転を終えて1年弱になるが、小学校は未完成で、子供たちは仮の校舎で学んでいる。

ソップフェーン村でも、今年から補償地での焼畑が始められており、NTPCからの米の支援がなくては生計の維持が難しい状況だ。



ソップフェーン村

### ◆ インタビュー: 移転村で商店を営む夫妻

支給された農地は0.6ヘクタールで、柵がやっとでき、整地をしている。農地には米を植える予定だという。つまり、焼畑を行うということだが、彼はラオス語で「焼畑」を意味する「ハイ」ではなく、「スワン・カーオ(=米の畑)」という言葉を使った。ラオス政府は、焼畑(ハイ)を抑制する政策を取っているため、彼は言葉を選んだのではないかと思われる。一方で、「種籾は企業が支給してくれた」といい、これが事実であれば、NTPCは補償地での焼畑を承認していることになる。しかし、わずか0.6ヘクタールの農地で焼畑を行っても、十分な休閑期間を置くことができないので、継続的な収穫は期待できない。

NTPCからは、毎月、成人一人あたり18キログラム、子供一人あたり12キログラムの米が支給されているが、これだけでは足りないという。足りない分は、魚を獲って得た収入から自分たちで購入しているという。移転してから2007年4月までの3ヶ月間は、米の他に、卵2個/人・週、魚0.4kg/人・週、肉0.4kg/人・週、電灯用のガソリンが支給されていたが、今は、米とガソリンのみだという。ターラーン村の夫妻と同様に、彼らも「いつ米の支給が止められるのかは知らない」

といい、「今止められたら、生活できなくなるので困る」と語った。

水牛については、プロジェクトが支援してくれると聞いているがまだもらっていないという。夫妻は21頭の水牛を保有していたが、2007年11月に2頭が死んでしまった。古い村の近くで飼育しており、川の水位が上がってきた際に、高地に移すのが間に合わなかったという。新しい村から4キロメートルほどの場所に10ヘクタールの放牧地が用意されているが、村全体で、まだ50頭の水牛が古い村の周りで飼育されているという。

給水ポンプは、5世帯に1つあり便利だが、農業用の灌漑設備はまだないので、ダムに水が溜まったら、企業が作ってくれるのではと期待していると語った。

タケノコは8キロメートル離れた古い村に採りに行っているので、洪水したら採れなくなるという。



ソップフェーン村の菜園

### 【ソップヒア村】

2006年6月頃に、旧ソップヒア村から40世帯と旧ナムニアン村から15世帯が移り、新たに現在のソップヒア村が作られた。現在のナムニアン村は、後から移転した旧ソップヒア村と旧ナムニアン村の家族で構成されている。

インタビューを行った家では、家の前の菜園は整えられ、果樹も植えられていた。テレビのチューナーがついている家も見られた。家屋や菜園からは、村人

の生活が安定しているように見える一方で、旧ソップヒア村には、移転を拒否し、古い村に残っている世帯もあるという。移転を拒んでいる理由は確認できなかった。

村人は、昨年、企業が奨励した牧草を栽培したが、育たなかった。今年から焼畑が始められるが、わずかな補償地で焼畑による米作は、持続的な手段になるとは考えられない。

### ◆ インタビュー：染色をしていた女性 3人(20-50代)

家族は旧ソップヒア村から移転してきた。企業の支援を受け、染色や織物をやっている。農地には今年から米を植える予定で、米のほかにはバナナ、サトウキビ、ライムなどを植えたいという。移転村の生活には満足しているというが、「(旧ソップヒアの住民のうち)8-9世帯は移転を拒否し、少し高地に移って、古い村に残っている」という。理由を尋ねたが、「分からない」という答えだった。

### ◆ インタビュー：女性(32歳)

旧ナムニアン村から移転してきた。今の村には幼稚園から小学校4年生までが通える学校もあり、村全体で11箇所の井戸もあるので、便利だという。家には、野菜や織物を売ったお金で買ったテレビもあり、今の村の生活には満足しているという。

0.6ヘクタールの畑には、今年は米と芋を植える予定だ。去年は、牧草を植えたが、育たなかった。「土壌は良いと思うので、10月、11月に米が収穫できれば、十分に食べていける」と話すが、来年以降、休閑期間を取れる土地はない。

かつて7頭の水牛を飼っていたが、「お金が必要だったから」売り払い、今は一頭もない。

タケノコは古い村の近くまで採りに行っているが、ダムが貯水されれば、採りに行くことはできなくなる。

## 【ソップマ村】

ソップマ村は74世帯の村で、2006年6-7月に移転してきた。ソップマ村でのインタビューに答えてくれた村人は、移転村の家屋や米の支援については満足している様子だったが、他の村と同様、補償地での焼畑による米作が始められており、将来の生計は不安定で、NTPCからの米の支援なしでは生計を立てられない状況だ。家畜の放牧地、NTPFsの栽培についても、課題を抱えている。

### ◆ インタビュー：男性(20代)とその母親(40代)

インタビューに答えてくれた母親は、「新しい家は大きくて、きれいだし、トイレもある。ポンプがあるのも便利。あとは、早く電気を通して欲しい」と、移転村の生活の快適さを語ってくれた。

一方で、男性に補償地について聞いたところ、「大きな木の伐採は企業がやってくれたが、その後の整地は自分たちでやることになっていて、今、焼畑の準備をしているところだ。去年は牧草を植えたが育たなかったの、今年から米を植えることになった」という。

男性は、「企業からの米支援と焼畑の米が収穫できれば、食べていけるが、企業や政府の支援を今止められたら、生活できない」と語った。

タケノコなどのNTPFsの採集については、今も古い村の周りで行っているという。

11頭の水牛は森の中で放し飼いにしている。ダムの水位が上がってきたら、移転村の近くに移す必要があるが、「(村には水牛が)たくさんいるので、餌が足りなくなるだろう」という。

### ◆ インタビュー：商店を営む夫妻(30-40代)

夫妻の農地は0.6ヘクタールで、去年は草を植えたが、育たなかった。そのため、今年も米を植えるという。「来年以降、米を連作することになるのか？」と聞くと、「米は同じ土地で連作できないので、米とウモ

ロコシを交互に植える」との答えが返ってきた。

NTPFsの採集について尋ねると、「歩いて15分くらいの森から、娘がタケノコを取ってきているが、水没したら行けなくなる」という。

移転後3ヶ月は、NTPCから卵、肉、米などの支給があった。今は米の支援のみだが、足りているという。

水牛は7頭いたが、4頭にまで減った。昨年、3頭が行方不明になった。歩いて20分ほどの場所に放牧していて、「洪水で死んでしまったのではないか」という。「(残った水牛は)ダムの水位が上がってきたら、水没したら、山の上の放牧地に移すが、歩いて2時間かかる」と話した。

## 【ナカイヌア村】

### ◆ インタビュー：元村長の男性(50代)

男性と妻は、2008年3月30日に新しい村に引っ越してきた。新しい家は、まだ窓がはめられていないなど、完全には建築が終わっていないという。移転村の小学校もまだ完成しておらず、子供たちはまだ古い村の学校に通っている。

補償地として与えられた0.66ヘクタールの畑は、やっと柵ができたところで、まだ整地は終わっていないが、雨季に入ったら米を植える予定だという。畑に米を植えることについて、専門家が土壌調査などを行って、適していると判断されたという。

補償地の土地の権利書は2009年にももらえる予定で、完成すれば家の登記もしてもらえると聞いているという。

ダムができれば村の水田は水没するが、「水が引く乾季に水田ができるかもしれない」という。しかし、ダムの貯水池で水田耕作を行うことは、土壌の面、安全面で可能だとは考えにくい。また、カムアン県で農業技術を支援するNGOによれば、この辺りは乾季の気温が低いので、乾季の水田耕作は難しいのではないかといい。

夫妻はかつて、5 頭の水牛を飼育していたが、「老夫婦 2 人だけで面倒を見られる人がいないから」という理由で、全て手放した。村全体ではもともと 400 頭くらい水牛がいたが、今は 300 頭くらいに減っているという。

NTPC からは、米(18kg/人・月)、卵(2 個/人・週)、生肉(0.2kg/人・週)、干し肉(0.2kg/人・週)などの配給がある。

彼自身は、他の村人 4 人とともに、プロジェクトの一環として作られたコミュニティ・フォレスト組合で働いて、決まった収入がある。その他の村人は建設現場で日雇い労働をすることもある。日当は、25,000 キープだが、仕事があるときだけ行くので、月の収入は決まっていないという。

彼に「将来気がかりなことは？」と尋ねると、「新しい職業に適應できるかどうか」という一方で、「今よりも良い生活になることを望んでいる」との答えが返ってきた。貯水が終われば、企業から、2 世帯にボート 1 艘が支給される予定で、貯水池で漁業ができると期待しているという。

### 【ウドムスック村】

ウドムスックはナカイ郡の中心地だが、貯水池の影響を受ける一部の世帯が、移転することになっている。しかし、湛水が開始された 4 月になっても、20~30 軒ほどの住居は未完成のままだった。



湛水開始後も未完成の住居が残っていた

### 【ドーン村】

ドーン村の移転は 2007 年 6 月に行われた。現在の住居は 2008 年 2 月にできたばかりで、それまでは仮の居住地に住んでいたという。ドーン村でも、移転村のインフラについては満足しているという声が聞かれたが、NTPC が支援してきた商品作物栽培の失敗と深刻な農地不足の問題が見えてきた。

#### ◆ インタビュー: 商店を営む家族、買い物客ら

新しい村には、まだ電気は引かれていないが、NTPC の支援による給水ポンプ、道路、トイレがあり、古い村よりも便利だという。

一方で、ドーン村でも、去年はほとんどの世帯が牧草を植えたが育たなかったといい、畑を焼き、6 月に米やイモを植える準備が行われている。

インタビューに答えた一人の男性は、「昔の村には水田が 1 ヘクタールあり、焼畑もやっていた。今は 1 箇所しか農地がない」と話した。その農地も「石だらけで、土壌が良くないので、収穫は期待できない」という。

商品作物栽培について尋ねると、「野菜は自分たちで食べる分しか植えていない」と答えた。別の男性も、「企業から野菜(青菜、キャベツ、空芯菜、キュウリ、たまねぎ、サラダ菜など)の栽培のトレーニングを受けたが、うまく育たなかったので、今はやっていない。今植えているのは、自家用のトウガラシやナスくらいだ」という。

現在、村全体で 1,000 頭ほどの水牛がいるが、牧草や水が豊富な古い村の近くで放牧している。新しい村の近くでは、十分なエサが確保できない。

#### ◆ インタビュー: 村の近くの焼畑の準備をしていた男性(50 代)

補償地の整地を行っているところで、NTPC からは柵の取り付けのために 200,000 キープ、整地のために 150,000 キープの支援を受けた。雨季に備え、家



族とともに焼畑の準備をしているところだという。

男性の家族は、古い村に 2 ヘクタールの水田を持っていて、毎年平均すると、玄米で 1.6 トンの収穫があった。それに加えて焼畑耕作も行っていて、150 キログラムくらいの収穫があったという。しかし、今は水田はなく、与えられた土地は 0.6 ヘクタールで、8 人家族が食べていくのは足りない。そのため、NTPC と政府に頼んで、隣接している土地も使わせてもらっている。しかし、土地が良くないので、両方合わせても、十分な米は収穫できないだろうと男性は考えている。

現在も、NTPC から支給される米では足りないので、毎月 50 キログラムほどの米を自分で購入する必要があるという。

また、水牛についても、「かつて水牛を 3 頭飼っていたが、育てる場所がないので、手放してしまった」と話した。



ドーン村の補償地で焼畑の準備をする女性

### 【ノンブアサーティット村】

ノンブアサーティット村は、移転パイロット村で、2002 年から 2003 年にかけて移転が行われた。

#### ◆ インタビュー: 女性(40 代)とその娘 2 人(20 代)

家族は 2003 年 2 月に移転してきた。移転村は、電気や井戸などがあり便利だという。一方で、家屋については、「トイレがしっかりしていないのが不満。

ちゃんとしたものを作って欲しい」、「屋根がさびびてきている。取り替えたいがお金がない」と不満を語った。

娘の夫はプロジェクトの試験農園で働いていて、20,000 キープ/日の収入があり、月収は 400,000 キープほどになるという。試験農園の雇用がいつまで確保されているのかは知らないが、「今のプロジェクトが終われば、新しいプロジェクトが来るはず」だという。

家族の農園は 0.5 ヘクタールで、果物、キャベツ、青菜などを植えているが、女性は「みんなが同じものと作っているから高く売れない」と話す。

2004 年から米も作っていて、米を収穫した後に、野菜を植えるというサイクルで農業を営んでいるという。NTPC からは、野菜栽培については、今も肥料の支給を受けている。

十分な水を確保できないので、村の近くに水田を作ることはできないという。

水牛 3 頭、牛 2 頭を飼っていて、そのうち牛はプロジェクトの牛銀行からの支援を受けたものだという。水牛はもともと 5 頭いたが、2 頭は去年死んでしまった。「エサがなく痩せて死んでしまった」というが、プロジェクトからの支援は受けられなかった。



ノンブアサーティット村

#### 4. 主な懸念点

今回のナムトゥン2の移転村での調査は、わずか2日間の訪問であり、またインタビューでは、日中村にいる商店主などに対象が偏りがちで、得られた情報は限られているが、それでも、移転村に共通するいくつかの深刻な問題が浮き彫りになった。

##### (1) 商品作物栽培の失敗と焼畑農業への転換

今回訪問した全ての村で、村人はプロジェクトの補償として与えられた農地での焼畑耕作の準備をしていた。移転してきたばかりのナカイヌア村やドーン村のみならず、移転から2年が経つソップヒア村やソップマ村、移転パイロット村のノンブアサーティット村でも焼畑が行われている。また、今回インタビューした村人の多くは、来年以降も米作を続けていくと考えていて、社会開発計画(SDP)に挙げられている棚田を作る計画は、パイロット村を含め、どこの村でも実現していなかった。一方で、NTPCが推奨する商品作物栽培についても、栽培農家の増加に伴って価格が下落している。

また、カムアン県の平均的な焼畑での収穫は、0.6~1トン/ヘクタールだといい、1世帯あたり0.66ヘクタールの農地では、多くの世帯では、食べていくのに十分な米を収穫できないだろう。さらに、来年以降、休閑期間を置ける土地はないので、焼畑による米作が同じ土地で繰り返される可能性は高い。そうなれば、数年後には、土壌悪化などの問題が深刻になると推定される。

移転住民たちは、安定した生計が営めるようになるまでNTPCが米などをサポートしてくれると信じており、現時点で支援が打ち切られたら暮らしていけないと感じている(ターラーン村、ソップマ村でのインタビュー)。商品作物栽培が行き詰まり、休閑期間を置けない焼畑に頼らざるを得ない移転村の状況の中で、「自立」の名の下に、支援が打ち切られ、移転住民の生活が困窮することはあってはならない。

##### (2) 家畜の放牧地の不足

多くの村人が、水が上がってくるぎりぎりまで、水没予定地で水牛や牛の放牧を行っている。つまり、移転地に十分な放牧地が確保されていないことは明らかだ。ダムに水が溜められた後、今水没予定地で放牧されている家畜をそのまま新しい移転地に移せるのかは大いに疑問だ。

現在の居住地から離れたところで飼育しているため、川の水位が上昇した際に、水牛を避難させることができず、水牛を失った(ソップフェーン村、ソップマ村)、十分なエサがなく、水牛が痩せ衰えて死んでしまった(ノンブアサーティット村)という話も聞かれた。これらは、新しい移転村に十分な放牧地が確保されていなければ起こらなかった事態であるが、NTPCからの補償などは行われていない。現在多くの家畜が放牧されている土地がダムに沈めば、牧草の不足はより深刻になると考えられる。

昨年、NTPCは補償地で牧草の栽培を奨励したというが、植えた草は育たなかった(ソップヒア村、ソップマ村、ドーン村のインタビュー)。また、カムアン県で農業支援に関わるNGOのスタッフによれば、0.66ヘクタールの土地では、牧草が十分に育ったとしても、これまで移転住民たちが所有していた頭数の家畜を飼育することは難しいという。

### (3) NTFPsへのアクセスの遮断

多くの村では、NTFPsの採取は今も水没予定地で行われており、水没後は収穫が難しくなる。タケノコなどのNTFPsは、村人にとって貴重な食料であるばかりか、現金収入源となっているので、NTFPsが採取できなくなることによる影響は大きいと考えられる。

### (4) 未完了のバイオマス除去

SDP には、「貯水池で高い漁獲量を得るためには、水質の維持が非常に重要である。湛水前にバイオマスの除去を行うことで、貯水池の水質が改善される」「湛水後、数年間、ある程度の水質を確保するためには、ナカイ高原に残ったバイオマス(地表および地下)は可能な限り除去されなければならない」(24.5.1.1)とあるにも関わらず、貯水予定地のバイオマスの除去が全然進んでいない。このまま貯水池が作られれば、水質の悪化が予想され、下流や貯水池漁業への影響が懸念される。

### (5) 住民移転事業の遅れ

4月に湛水が始まったのにも関わらず、ナカイヌア村では、まだ移転地に家が完成していない世帯があった。また、移転を完了した世帯でも、窓が取り付けられていないなど、家が完成する前に移転が行われた。小学校も未完成のまま。移転計画が遅れたにもかかわらず、建設工事の進捗に合わせて、移転が急がれた結果、移転住民に不便が強いられている。ウドムスック村でも、数十世帯の住居が建設途中だった。元々住んでいた村を離れて2年が経つソップフェーン村でも、小学校が完成しておらず、子供たちは仮の校舎で学んでいる。

作成: 東 智美(メコン・ウォッチ)

特定非営利活動法人  
メコン・ウォッチ  
〒110-0015  
東京都台東区東上野 1-20-6 丸幸ビル 2 階  
Tel: 03-3832-5034  
Fax: 03-3832-5039  
E-mail: info@mekongwatch.org  
Website: www.mekongwatch.org